

イチゴうどんこ病の発生抑制のための各種条件

農業研究部

1. 研究の背景

イチゴ本圃におけるうどんこ病の発生を抑制するには、本病に罹病していない苗を育成する事が重要である。そこで、イチゴの育苗期間中のケイ酸施肥、複葉の摘葉、高温処理について、定植後の防除効果を検討した。

2. 研究成果の内容・普及のポイント

育苗期間中のケイ酸の葉面散布は、定植後の本病の発生抑制効果がある(図1)。苗の第1複葉を除去すると、その後の展開葉において本病の発生抑制効果がある(図2)。収量への影響はほぼ見られない。育苗期に雨よけハウス等において高温で育苗すると、定植後の本病の発生は少なく(図3)、遮光等により低温で育苗すると定植後の本病の発生は多い(図4)。

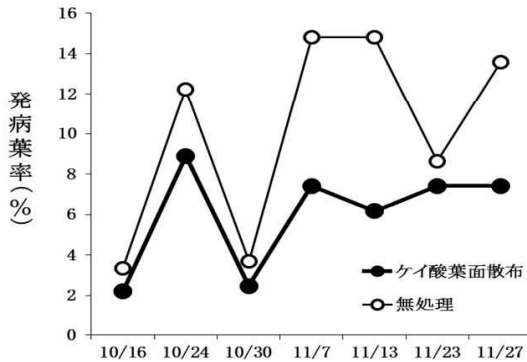


図1 ケイ酸葉面散布後のうどんこ病の発病推移
注)7月25日～9月12日まで、7日毎にケイ酸溶液(SiO₂:200ppm)を葉面散布。

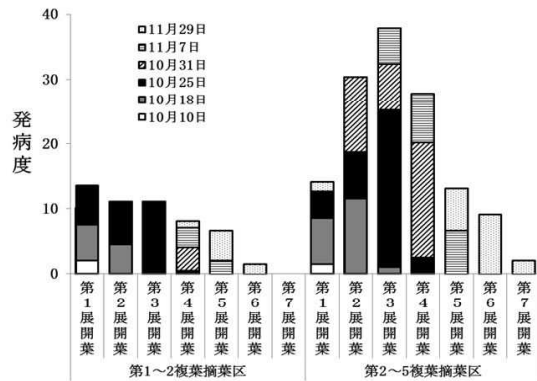


図2 複葉摘葉後のうどんこ病の発病推移
注)9月25日に複葉摘葉。

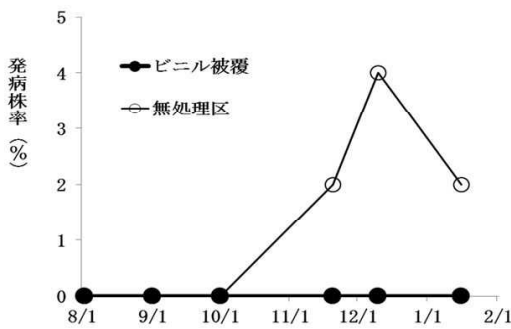


図3 高温育苗後のうどんこ病の発病推移
注)7月17日～8月31日までビニル被覆。定植9月22日

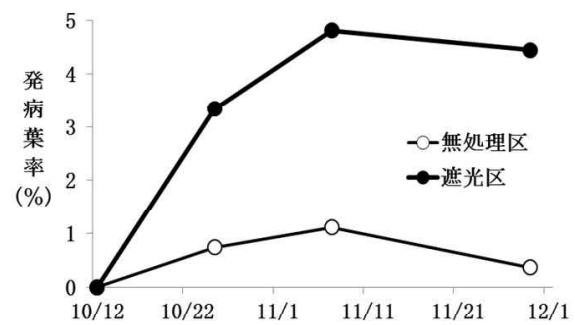


図4 遮光処理後のうどんこ病の発病推移
注)8月7日～9月25日まで寒冷紗被覆。定植9月25日。

3. 期待される効果

育苗期に各処理を行うことで、定植後のうどんこ病の発生を抑制することができる。育苗を雨よけハウスで行うと炭疽病の予防にも効果的である。

4. 担当機関連絡先

農業研究部 病害虫チーム
TEL : 0974-28-2078
住所 : 豊後大野市三重町赤嶺2328-8